

氏名	大西泰裕
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博乙第 4132 号
学位授与の日付	平成18年9月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	インターフェロン著効C型肝炎例における肝発癌危険因子としての血清鉄値の有用性
論文審査委員	教授 松川 昭博 教授 山田 雅夫 助教授 宮崎 正博

学位論文内容の要旨

C型慢性肝炎に対するインターフェロン(IFN)治療により肝細胞癌(HCC)の発生が有意に抑制されることが報告されている。しかしながらIFNによりウイルス学的著効が得られたにもかかわらずHCCの発生がみられる例もある。我々はウイルス学的著効例におけるHCC発生の危険因子を解析するため、著効163症例について検討した。このうち、平均4.2年の観察期間において7例にHCCの発生が認められた。HCCの年発生率は全体で1.01%であった。HCC発生の危険因子の解析では、治療開始時の肝線維化進展度、飲酒歴、年齢に加え、血清鉄値が有意な危険因子であった(各々 $P = 0.006$, $P = 0.020$, $P = 0.048$, $P = 0.006$)。治療開始時の肝線維化進展度がF3からF4の症例ではF0からF2までの症例と比較して累積発癌率が有意に高値であった($P < 0.001$)。同様に治療開始時の血清鉄値が160 mg/dl以上の症例では160 mg/dl未満の症例と比較して累積発癌率が有意に高値であった($P < 0.001$)。以上より、IFN治療開始時の血清鉄値は、肝組織線維化進展度と同様にIFN著効例におけるHCC発生の危険因子であり、血清鉄高値症例ではより厳重な経過観察が必要である。

論文審査結果の要旨

インターフェロンは、C型肝炎に対する根本的治療薬として多くの症例に投与され、その臨床効果が報告されている。しかし、インターフェロンによりウイルス学的著効が得られた症例にも少数ながら肝癌発生がみられる。大西泰裕氏は、C型肝炎に対するインターフェロン治療によりウイルス学的著効をみた自件例163例における肝癌発生の危険因子を、治療開始前の血液学的データをもとに解析した。その結果、肝線維化進展度、飲酒歴、年齢に加え、インターフェロン治療前の血清鉄値が有意な危険因子であることを見いだした。

審査員からは、「採血検体はインターフェロン治療開始前のみであり、治療期間中あるいは治療終了後の経時的な検討はなされておらず、血清鉄の変動を中心とした今後の検討が必要」との意見が出された。しかし、審査時の質問に対しては簡潔・的確に回答しており、今回の検討結果の問題点、今後の研究の展望もはっきりと認識している。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。